

本企画は、「蓮岡氏がアフガニスタンの何も無い荒んだ状況下で絵本を見ている子どもと出会った」という話を聞いたことから始まりました。

それは、自分の意思でなく親に連れられて、日本にやってきた子ども達が、それまでの言葉ではなく、日本語で学ばなくてはならなくなった。その不自由さは、アフガニスタンの何も無い状況にある子どもたちと同じではないかと思ったのです。そして、アフガニスタンの子どもが絵本に出会ったように、日本に来た子どもたちに、彼らのわかる言葉の本が届けられることを願って、講演会を開催することにしました。

私、石原はイラクの隣のクウェートに数年ですが、住んでいたことがあります。

アラビア語の国なので、私は何の接点もないと思っていましたが、ある時、町の本屋さんに日本語の本があるというので行き、文庫本が2冊売られているのを見つけました。それを見た時、私は無視された存在でなく、この国にいたことが認められているようで、うれしかったのを覚えています。

この気持ちを思い出すと、今、日本に来た子どもが、日本に来て良かったのだと思うには、図書館や学校のような公的な場所に自分のわかる言葉の本があることも、ひとつではないかと思うのです。さらに、その本は、自分の言語と日本語の二重表記であると、もっと、うれしいだろうと思うのです。同じ内容だけれど、文字と音が違うのだと分かると、知らない言葉であるけれど、覚えてみよう、知ってみよう、周りの日本人と話してみようと思うと思いました。

外国ルーツの子どもたちの読書環境をよくするために、RAINBOWでは、今年18冊のバイリンガル絵本を出版しました。多くの人の方で作った手作り絵本ですが、ISBNもついています。

どのようなものかは、RAINBOWのHPに掲載していますので、ご覧ください。

<https://www.rainbow-ehon.com>

公立図書館や学校図書館では、日本に住んでいる外国につながる子どもたちの言語資料をそろえてほしいです。

NPO法人おおさかこども多文化センターでは、長年、「多文化にふれる えほんのひろば」を開催しています。

そこでは、外国ルーツの高校生や子どもたちも多言語の絵本を読んだり、自分の母語の文字の紹介をしたりして活躍してくれています。

今回は、図書館という場所から離れて、デパートで展開された多言語絵本活動など、たいへん興味深い動きについてもお話させていただきます。